

発達障害幼児の保護者への保育士・幼稚園教師・療育施設職員の支援のあり方
～A市療育施設の保護者及び保育士・幼稚園教師・療育施設職員を対象とした
アンケート調査より～

三重大学大学院 教育学研究科
教育科学専攻 特別支援教育領域

213M013 仲森みどり

2016年2月15日

目次

I 問題と目的	1
II 方法	3
1. 発達の遅れが心配な幼児の保護者への第 1 調査	3
2. 保育士・幼稚園教師・療育施設職員へのアンケート調査	5
3. 発達の遅れが心配な幼児の保護者への第 2 調査	7
III 結果	10
1. A 市療育施設へ通園する子どもの保護者への第 1 調査結果	10
2. 保育士・幼稚園教師に対するアンケート調査結果	16
(1) 保育士・幼稚園教師と該当幼児の概要	16
(2) 保護者支援について	18
(3) 障害幼児支援の上で必要なこと	19
3. 療育施設職員に対するアンケート調査結果	20
(1) A 市療育施設職員の概要	20
(2) 発達障害幼児への保育について	20
(3) 保護者支援について	21
(4) 障害幼児支援の上で必要なこと	23
4. A 市療育施設へ通園する子どもの保護者への第 2 調査結果	24
(1) 保護者・幼児の概要	24
(2) 子どもの発達の心配に対する保護者の気持ちについて	24
5. A 市療育施設に通園する子どもの保護者への第 1 調査の自由記述回答結果	27
6. A 市療育施設に通園する子どもの保護者への第 2 調査の自由記述回答結果	33
IV 考察	35
1. 発達障害児の保護者への理解	35
(1) 発達の遅れが心配な幼児の保護者への第 1 調査結果の特徴	35
(2) 発達の遅れが心配な幼児の保護者への第 2 調査結果の特徴	36
2. 保育士・幼稚園教師・療育施設職員による障害幼児保護者への支援	37

(1) 保育士・幼稚園教師による保護者への支援	37
(2) 療育施設職員による保護者への支援	38
3. 発達障害の保護者への支援	39
V. 終わりに	41
謝辞	42
参考文献	42
付録	

I 問題と目的

平成 16 年には、「発達障害者支援法」が成立し、平成 17 年に「発達障害者支援法施行令」及び「発達障害者支援法施行規則」が策定された。発達障害者支援法では、発達障害は「自閉症，アスペルガー症候群，その他の広汎性発達障害，学習障害，注意欠陥多動性障害，その他これに類する脳機能障害であってその症状が通常低年齢において発現するもの」と定義されている¹³⁾。この法の施行によって、国及び地方自治体は以下のことを責務とした²⁾ 13)。

- ①発達障害の子どもたちの早期発見
- ②早期支援、早期療育の開始
- ③適切な学校教育のための個別の支援計画や個別の教育的支援
- ④就労支援
- ⑤地域生活支援
- ⑥権利擁護
- ⑦家族への支援
- ⑧専門的医療機関の確保

この 8 項目の中の 1 つにもあるように、発達障害児・者はもとより、その家族に対しても支援を行うことが記されている。発達障害がある子どもの家族は、障害のない子どもの家族に比べて、様々な心理的な負担感や困難を抱えていることが指摘されている¹⁴⁾。道原・岩元ら¹¹⁾も、発達障害のある子どもの親にはうつ病あるいはうつ状態が多いことを述べている。特に、直接的な養育者である母親の精神的健康に関する研究は多く、自閉症のある子どもの母親は、障害のない子どもをもつ母親よりもストレスが高いことが報告されている¹⁵⁾。

また山下²⁷⁾は、定型発達をしている子どもの親と比べて、ADHD のある子どもの親は、多くの育児ストレスを経験することが先行研究で報告されていると述べている。ADHD の重症度が高いほど育児ストレスが高く、睡眠障害、夫婦間の不和、離婚率の高さ、アルコール依存や母親の抑うつの高さなどが知らされている²⁷⁾。眞野・宇野⁹⁾は、日本の ADHD のある子どもの母親 36 名と定型発達をしている子どもの母親 36 名の育児ストレスや養育態度を比較した。定型発達の子どもの母親と比較して、ADHD の子どもの母親の育児ストレスは高く、否定的な養育態度（不満、非難、厳格、干渉、矛盾、不一致）をとる傾向が有意に見られたと報告している。さらに ADHD のある子どもは、親を喜ばせる反応が少ない、不注意／多動の行動特性により、母親の子どもに対する愛着を減少させ、さらに厳格で非難的養育態度と結びついていることが示唆されている⁹⁾。ADHD のある子どもは、虐待を受けるリスクも高く、親に否定的な愛着感が生まれやすいような ADHD の特性に応じた早期からの育児支援、育児ストレス対策を要することが言われている²⁷⁾。

また野邑・辻井・石川¹⁶⁾は、高機能広汎性発達障害のある子どもの母親は、障害のない

子どもをもつ母親より、抑うつが高いことを報告している。なぜなら、高機能広汎性発達障害は、その障害特性ゆえに親や家族は特有の困難さを抱えやすいということがその要因の 1 つと考えられる。また、高機能広汎性発達障害は外から見えにくいいため、その子どもをもつ親や家族は、子どもに関して周囲からの理解を得にくく、大きなストレスを抱えることにつながりやすい²⁰⁾。

そして、湯沢・渡邊・松永³⁰⁾の研究では、自閉症児の母親が子育てに関するストレスを最も強く受けた時期について、4段階の年齢群に分類したところ、88名中、幼児期が69名(78.4%)、学童期が13名(18.6%)、思春期・青年期1名(3.7%)、成人期5名(5.0%)だった。母親の8割近くが幼児期に最も強くストレスを受けたと回答しており、幼児期に強いストレスを受けやすいことを述べている。また森口ら¹²⁾は、発達障害がある子どもの母親は、子どもの乳幼児期に精神的に不安定になり、その時期が最も支援が必要であることを指摘している。田中²⁴⁾も、ADHDのある子どもの保護者は、幼稚園・保育園時代に、保育士や他の養育者からの頻繁な指摘や注意という周囲からの批判に晒され、孤立無援感を抱きやすくなっているか、わが子の行動を、他の子どもたちと比較して事の重大さに気づき動揺していることが少なくないと述べている。

筆者が保育士をしていた時代の経験でも、特にADHDのある子どもや高機能広汎性発達障害のある子どもは周囲から困った存在として捉えられていたように認識している。例えば、ADHDがあると思われる子どもは不注意・多動性などの行動特性から、他の子どもが玩具で作っていたものなどに無意識に当たり壊してしまう行動や、身体がぶつかる、触れることから起こる友達間のトラブルが多かった。

高機能広汎性発達障害があると思われる子どもは、保育士が質問したことに対しての答えではなく、そのときに疑問に思っていることや感じていることを口にすることが多くあった。また、周囲の友達に対しての言葉がけなどでもトラブルをまねくこともあった。

子どもたちが、保育園での出来事を自分の言葉で親に伝えられる3歳(年少組)ぐらいの年齢になると、保護者の間でも困った子として捉えられがちになる。保育園は毎日保護者が、子どもの送迎を行うことが多いため、子どもたちの様子を目にすることが多くなる。その際、発達障害のある子どもの保護者は、我が子の他の子とは違う行動に対して、肩身の狭い様子で、申し訳なさそうにしている姿や急いでその場を立ち去ろうとする姿を目にした。

このことから言えるように、周囲の保護者から理解が得られにくく、保護者同士のコミュニケーションをもつ機会が減り、発達障害のある子どもの保護者が孤立感を生みやすい要因となると考える。また、子どもも保護者も保育園、幼稚園入園で、初めての集団生活により他の子どもと比較する機会となる。そういった背景もあり、筆者自身は、保育園・幼稚園での生活を経験する乳幼児期は、子どもも保護者も不安を抱え、気持ちが不安定になる第1の段階ではないかと考える。

そして、乳幼児期は義務教育ではないため、保育園や幼稚園には通園せず、家庭で育児

をしている場合もある。一般的に父親は、仕事で社会的役割や家庭の経済的役割を果たしていることが多いため、日中の育児は母親が担っていることが多い。この時期、家庭で育児をしている場合、子どもの発達への心配や子育てに不安を抱きながらも相談機関に自らつながることが少ない。様々な負担があることが示唆され、乳幼児期の保護者への支援がいかに重要であるかということが伺える。

乳幼児期の発達障害児への支援は、基本的に母子支援である²⁹⁾。そして、ソーシャルサポートは、ストレス反応を緩和する要因とされている。太田¹⁹⁾によれば、発達障害がある子どもの母親が最も支援を受けているサポート源は配偶者であり、湯沢ら³⁰⁾によれば、自閉症の子どもの母親が助けになると感じているサポート源は、同じ障害がある子どもの親、障害のない我が子、親の会の友人などである。このような近親者からのサポートに関する研究と並んで、医療機関、療育機関、教育機関などの専門機関の支援状況に関する報告もされている¹¹⁾。呉・岡田・朴・中嶋⁶⁾は、障害児通園施設に通う児童をもつ家族は、障害に関する知識や利用できる施設や制度などの情報提供に関するニーズが高いことを報告している。また、地域の発達障害支援センターの相談内容も、子どもや問題行動への対処方法が上位にあることから¹¹⁾、専門機関が家族にとって重要なサポート源の1つであることは明らかである。しかし、専門機関からのサポートと母親の精神的健康、特に抑うつとの関連について調査をした研究は少ない。

以上のことから、乳幼児期の発達障害のある子どもの保護者（特に母親に焦点を当てる）の心理的・精神的状況を検証し、支援者側の心理的・精神的サポートの重要性を検討していく。また、専門機関が家族にとって重要なサポート源の1つであることは明らかであるため、専門機関からのサポートと母親の精神的健康、特に抑うつとの関連について検討していく。

II 方法

A. 方法1 ―発達の遅れが心配な幼児の保護者への第1調査―

1. 調査時期

2014年2月上旬

2. 調査協力者

対象者は、A市療育施設（保育園・幼稚園入園前、一部就学前の幼児の療育・保育・指導体制に基づいた早期療育・保育の場）に通所している、言葉・身体運動面・生活面・社会性など発達の遅れが心配な子どもの保護者33名である。（母親32名、父親1名）。保護者の年齢は、20代後半～40代前半で、平均年齢は、35.3歳。子どもの年齢は、2歳～5歳（2歳児2名、3歳児15名、4歳児15名、5歳児1名）。

診断を受けていない子どもが、8名（自閉スペクトラム症が疑われる子ども6名、ADHDが疑われる子ども2名）。診断を受けた子どもが、25名（自閉スペクトラム症8名、知的障

害 6 名，その他 11 名 [肢体不自由、ダウン症、WEST 症候群、出産時より超低体重児、生後 2 か月から、てんかん（肢体不自由）、不明]）。

事前に A 市療育施設の施設長に承諾を得て、保護者の勉強会の場を提供いただき実施。その場で、口頭で目的及び倫理的配慮に関して説明し、保護者の協力を得た。A 市療育施設の通園幼児童の保護者の協力を得て、集合（グループ）調査での質問紙調査を実施した。質問紙は、およそ 10 分以内に回答できる質問紙を用い、その場で全員分、回収した。

3. 調査項目の概要

(1) 保護者の年齢、性別、子どもの年齢

(2) 今現在の子育ての気持ちについて

【育児困難さ、育児疲れ、育児不安、子どもへの愛着、他の子どもと比較する気持ちを見る質問内容】（以下の 8 項目）

①子どもと一緒に落ち着いた気持ちで外出できる ②子どもに感情的に接してしまう ③他の子どもの親から孤立していると感じる ④育児に疲れている ⑤この子をどうやって育てていけばよいか自信がなくなることがある ⑥子どもに愛着を感じる ⑦他の子との成長の差を感じ、つらいことがある ⑧子どものことは理解できている

(3) 今現在の保護者自身の気持ち

抑うつ傾向、障害の受容を見る質問内容（以下の 8 項目）

①悲観的になりやすい ②何ともいえず淋しい気持ちになる ③この子を育てて、人の苦しみ、悩み、嘆きが心からわかるようになった ④家族の他の者へのすまなさを感じる ⑤この子の将来を見通しておかなければならないと焦りを感じている ⑥どうして私だけが、子どものことでこれほどまでに悩まなければならないのかと思うことがある ⑦この子を育てることで、自分自身が人間的に成長できたと思うことがある ⑧この子のあるがままに受け入れていこうと考えるようになった

(4) 子どもの発達の心配に対する気持ちについて

①発達の心配に気づいたときの年齢

②発達の心配に気づいたきっかけ（1 つだけに○をつけて選択）

・乳幼児健康診査での診断の有無・他の子と比較して・その他

③発達の心配に気づいたときの気持ち（自由記述回答）

(5) 子どもが障害有と診断を受けた保護者への質問（わかった保護者への質問）

①診断を受けた年齢

②診断を受けた場所（複数回答可）

病院、児童相談所、保健センター、その他

③障害があるということを知ったときの気持ち（自由記述回答）

④障害を知ったあと、何か支えになったこと（自由記述）

⑤子どもの障害についての最大の理解者（1 つだけに○をつけて選択）

1) 配偶者 2) 父親 3) 母親 4) 配偶者の父親 5) 配偶者の母親 6) その他

(6) 子どもが診断を受けていない保護者への質問

子どもの行動面や症状のチェック項目（複数回答可）

【感覚過敏、多動、注意がそれる、こだわり、コミュニケーションの遅れについて】

①感覚に過敏である ②じっとしているのが苦手で落ち着きがない ③電車や図鑑、地図など独特な興味をもって、とても詳しく覚える ④視線が合いづらい ⑤気が散りやすい ⑥順番を待つことが難しい ⑦感情を共有しづらい ⑧決まった行動や儀式をしていることを好む ⑨課題や遊びの活動で注意を集中し続けることが難しい ⑩予定外のこと、見通しが立たないことに対して不安が強い ⑪いけないとわかっているのについやってしまう ⑫友達と遊ぶことが少ない

(7) 支援の場に参加したことがあるか（A 市療育施設以外で）

ある・ない（選択肢）

参加して良かったところ、役にたったこと（自由記述回答）

(8) 子育てに関して最大の理解者（1 つだけに○をつけて選択）

1) 配偶者 2) 父親 3) 母親 4) 配偶者の父親 5) 配偶者の母親 6) その他

4.分析

子育ての気持ち、現在の保護者自身の気持ちについては、子どもが発達障害、またはその疑いがある 16 人と発達障害以外の 17 名に分けて χ^2 検定を行った。統計ソフトは、IBM SPSS Statistics21 を用いた。なお、知的障害だけの場合は、発達障害以外群に含めた。

B.方法 2 ―保育士・幼稚園教師・療育施設職員へのアンケート調査―

1.調査時期

2014 年 9 月上旬～12 月中旬

2.調査協力者

対象者は、A 市公立の幼稚園（3 園に依頼）に勤務する幼稚園教師（16 名）、B 市など他の市町村の公立保育園に勤める保育士（3 名）、学童保育所に勤める保育士（1 名）、公立幼稚園に勤める幼稚園教師（1 名）合計 21 名

A 市療育センターに勤務する保育士（30 名）、訓練士（1 名）、心理判定員（1 名）合計 32 名

A 市公立の幼稚園園長、A 市療育センターの施設長、各、幼稚園教諭、保育士に承諾を得て実施した。調査用紙は、無記名方式で郵送にて回収。

3.調査項目の概要

年齢、性別、保育歴、幼児教育歴、現在の勤務先

(1) 今までに、発達障害（自閉スペクトラム症，AD/HD，LD など）のある子ども、又は、発達障害があると思われる子どもの保育・幼児教育に（以下教育）に携わっていたことがあるか（又は、今現在携わっている）。（はい・いいえ どちらかに○をつけて選択）

(2) 資料 1 の質問（2-1～3-2）までは、現在を含め過去 3 年以内で保育・教育に携わり、最も印象に残っている子ども、一人を思い浮かべて回答をお願いした。

①何年前か ②思い浮かべた子どもの性別 ③思い浮かべた子どもの年齢

(3) 該当する幼児について当てはまるものを選択（1 つを○で選択）

①保育・教育に携わっていた（又は携わっている）発達障害と思われる子どもが診断を受けており、保護者も診断を受け入れている（又は受け入れていた）。

②診断を受けており、保育士側、教諭側（園側）も把握しているが保護者が診断を受け入れていない様子である。

③通院等はしているが、診断は受けていない。

④受診をすすめている（すすめた）が、まだ通院はしていない。

⑤何らかの要因はあると思われるが、保育士側、教諭側（園側）としては受診を言い出せないでおり、判断しづらく通院していない。

⑥その他

(4) 保育・教育に携わった、又は携わっている対象児（発達障害があると思われる子ども）のことを、主にどなたに具体的に相談されたか（又はするか）。（3 つを○で選択）

①対象児の保護者《母親，父親，祖母，祖父，その他（ ）》 ②園の職員

③関連する同職種の関係者 ④関連する他職種の関係者 ⑤医療関係者 ⑥その他 ⑦いない

(5) 保護者への支援についての質問

対象児（発達障害があると思われる子ども）の保護者への園での支援（働きかけ）は十分だ（だった）と思うか。（①②③④からそれぞれ 1 つを○で選択）

①十分である ②おおむね十分である ③やや不十分である ④不十分である

(6) 対象児（発達障害があると思われる子ども）の保護者への支援（働きかけ）をすることで、対象児に良い変化があらわれたことがあったか。（①②③④からそれぞれ 1 つを○で選択） ①よくあった ②少しあった ③あまりなかった ④なかった

(7) 思い浮かべて頂いていた子どものことだけではなく、全般的な形での回答をお願いした。

通園している（していた）対象児以外の保護者の方たちは、発達障害について（発達障害がある子どもに対して）一般に理解があると感じるか。（①②③④から 1 つを○で選択）

- ①多くの保護者がよく理解してくれている ②十分ではないが理解してくれている
③理解していただけない保護者が少しいる ④理解していただけない保護者が多い

(8) 通園している（していた）対象児以外の保護者の方たちに、発達障害について（発達障害がある子どもに対して）理解をして頂くためにどのような工夫をしているか。（自由記述回答）

(9) 対象児（発達障害があると思われる子ども）の保護者の様子や気持ちはどのように見えるか。またはどのように感じるか。（自由記述回答）

(10) 対象児（発達障害があると思われる子ども）の発達を支援していくためには、保育園や保育士、幼稚園や幼稚園教諭には何が必要だと思うか。（特に重要だと思うもの3つを○で選択）

- ①園内の協力体制 ②園内のカンファレンス ③障害に関する知識の向上（勉強会、講演会に参加する）④対象児の保護者との面接（状態把握、信頼関係の構築）⑤関連する業種の専門家との対象児の情報交換、協働 ⑥障害のある子どもの親の会の充実 ⑦その他

(11) 発達障害のある子どもの保育、教育を充実させていくために、どの分野の方と連携していくとよいと思うか。（該当するもの全てに○）

- ①対象児の母親 ②対象児の父親 ③対象児の祖母 ④対象児の祖父 ⑤園の職員
⑥関連する同職種の関係者 ⑦関連する他職種の関係者 ⑧医療関係者 ⑨対象児以外の保護者 ⑩その他

(12) 対象児（発達障害があると思われる子ども）の保護者への支援を行う上で、どのようなことが重要だと思うか。（自由記述回答）

C.方法3 ―発達が遅れが心配な幼児の保護者への第2調査―

1. 調査時期

2015年3月上旬

2. 調査協力者

今回の第2調査は、第1調査ではできなかった質問や、第1調査の回答結果をふまえた質問を行った。

対象者は、A市の療育施設に通所している言葉・身体運動面・生活面など発達の遅れが心配な幼児の保護者35名である。（母親35名）。事前にA市療育施設の施設長に承諾を得て、保護者の勉強会の場を提供いただき実施。その場で、口頭で目的及び倫理的配慮に関して

説明し、保護者の協力を得て、集合（グループ）調査での質問紙調査を実施した。質問紙は、およそ 10 分以内で回答できる質問紙を用い、その場で全員分、回収した。

3. 調査項目の概要

(1) 保護者の年齢、性別、子どもの年齢、性別、A 市療育施設通園歴

(2) 子どもの発達の心配に対する気持ちについて

①発達の心配に気づいたときの年齢

②発達の心配に気づいたきっかけ（1 つだけに○をつけて選択）

1 歳半健診で、3 歳半健診で、他の子と比較して、その他

③発達の心配に気づいたときの気持ち（自由記述回答）

(3) 子どもが障害有と診断を受けた保護者への質問（わかった保護者への質問）

①診断を受けた年齢

②どのような診断（診断名等）を受けたか

③これまでの研究、A 市療育施設でのアンケート調査での回答結果をふまえた質問

【障害があるということを知ったときにどのように思ったか】

上記の質問に対して、以前のアンケート調査の回答結果（自由記述回答）では、以下の項目が回答としてあげられており、1～8 の項目から選択（複数回答可）

1.ショックで、大変辛かった、2.将来への不安、3.診断名に疑問を感じた、4.これからの人生設計が変わる、5.診断前にある程度覚悟していたので、大きなショックはなかった、6.もやもやした気持ちが晴れた、7.少しでも改善できることはないかと考えた、8.子どものために何でもできることをやろう

④1～8 の項目以外で思ったこと（自由記述回答）

(4) 子どもが診断を受けていない保護者への質問

子どもの行動面や症状のチェック項目（あてはまる項目全てに印）

感覚過敏、多動、注意がそれる、こだわり、コミュニケーションの遅れについて

(5) 過去に、子どもが A 市療育施設に通園する前に、保育園に通園していた子どもの保護者への質問

【過去に通っていた保育園の対象児以外の保護者たちは、子どもの様子や行動面に対して理解があると感じたか。】（1 つを選択）。

①多くの保護者がよく理解してくれていた ②十分ではないが理解してくれていた

③理解していただけない保護者が少しいた ④理解していただけない保護者が多かった

それぞれどのようなときにそのように、感じたか。（自由記述回答）

(6) 保育園・幼稚園の保育士や幼稚園教諭（支援者側）に、希望することについて。

1～7 項目から特にそう思うもの 3 つを選択し、順位をつけて番号で回答。

1.共感性と支持 2.専門性に裏づけされた具体的な助言 3.将来への見通しの示唆 4.人間関係へのサポート 5. 医療・福祉等との連携への支援と情報理解 6.医療的ケアやリハビ

リテーションの充実 7.その他（ ）

(7) (3) -③の質問と同様、これまでの研究やA市療育施設でのアンケート調査結果からわかったことをふまえた質問

【子どもの発達に何らかの心配のある保護者や、子どもに障害があると診断を受けた保護者に対して、「育児に疲れている」、「育児不安や育児ストレスがあるか」という質問内容に、「あてはまる」、「ややあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」の中から、1つを選択して回答するアンケートでは、60%の保護者が「ややあてはまる」または、「あてはまる」と回答を得た。

また、上記と同じ方法で「悲観的になりやすい」、「何ともいえず淋しい気持ちになる」という質問内容に回答を得たところ、60%の保護者の方が「ややあてはまる」または、「あてはまる」と回答を得た。(同時に子どもへの愛着について全員が愛着を感じ、90%の保護者が子どもをあるがままに受け入れようと考えられていた)

【この回答結果に共感できる保護者への質問】

①このような場合、どのような支援、サポートを希望するか。

1～7の項目の中から特にそう思うものを3つまで選択し、順位をつけて番号で回答

1.共感性と支持 2.専門性に裏づけされた具体的な助言 3.将来への見通しの示唆 4.人間関係へのサポート 5.ペアレント・トレーニング講座の充実 6.ピア・カウンセリングへの支援 7.医療・福祉等との連携への支援と情報理解

②1～7の項目以外で思われたこと（自由記述回答）

③A市療育施設や保育園・幼稚園に対策として、今後どのようなことを希望するか。（自由記述回答）

Ⅲ. 結果

1. A 市療育施設へ通園する子どもの保護者への第 1 調査結果

今現在の子育ての気持ちの質問に対して、「あてはまる」、「ややあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」の 4 件法で回答を得たところ、表 1-1 のような結果になった。

表 1-1 子育ての気持ち

	あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
子どもと一緒に落ち着いた気持ちで外出できる	6 (18%)	14 (42%)	10 (30%)	3 (9%)
子どもに感情的に接してしまいう	10 (30%)	12 (36%)	7 (21%)	4 (12%)
他の子どもの親から孤立していると感じる	4 (12%)	13 (39%)	10 (30%)	6 (18%)
育児に疲れている	2 (6%)	19 (58%)	10 (30%)	2 (6%)
この子をどうやって育てていけばよいか自信がなくなることがある	8 (24%)	17 (52%)	4 (12%)	4 (12%)
子どもに愛着を感じる	29 (88%)	4 (12%)	0 (0%)	0 (0%)
他の子との成長の差を感じ、つらいことがある	14 (42%)	17 (52%)	0 (0%)	2 (6%)
子どものことは理解できている	6 (18%)	22 (67%)	5 (15%)	0 (0%)

人数 (%) 表示

「子どもと一緒に落ち着いた気持ちで外出できる」「子どもに感情的に接してしまう」「他の子どもの親から孤立していると感じる」「育児に疲れている」「この子をどうやって育てていけばよいかわからなくなる」「他の子との成長の差を感じ、つらいことがある」は、育児困難、育児疲れ、子育ての不安、他の子どもとの比較の質問内容であり、「子どもに愛着を感じる」「子どものことは理解できている」は子どもに対する愛着などを見る内容としている。

この結果から見ると、「子どもに感情的に接してしまう」「育児に疲れている」「この子をどうやって育てていけばよいかわからなくなる」「他の子との成長の差を感じ、つらいことがある」の質問で、60%以上が「あてはまる」「ややあてはまる」と答えており、育児困難

や育児疲れを感じている保護者が多いことがわかる。

「子どもに愛着を感じる」の質問では、回答者合計 33 名の全員が「あてはまる」、「ややあてはまる」どちらかを選択しており、これらを合計すると子どもに愛着を感じている保護者が回答者 33 名（100%）という結果になっている。また、「子どものことは理解できている」の質問では「あてはまらない」の回答が 0 名（0%）という結果であった。

今現在の保護者自身の気持ちの質問に対して、「あてはまる」、「ややあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」の 4 件法で回答を得たところ、表 2-1 の結果となった。

「悲観的になりやすい」「何ともいえず淋しい気持ちになる」「家族の他の者へのすまなさを感じることもある」「この子の将来を見通しておかなければならないと焦りを感じている」「どうして私だけが、子どものことでこれほどまでに悩まなければならないのかと思うことがある」の項目は抑うつ傾向をみる質問内容とし、「この子を育てて、人の苦しみ、悩み、嘆きが心からわかるようになった」「この子を育てることで、自分自身が人間的に成長できたと思うことがある」「この子のことをあるがままに受け入れていこうと考えるようになった」は、障害の受容をみる内容としている。

表 2-1 のように抑うつ傾向に関連する「悲観的になりやすい」「何ともいえず淋しい気持ちになる」「家族の他の者へのすまなさを感じることもある」については、「あてはまる」は比較的少ないが、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると 60%以上となっている。障害の受容に関連する「この子を育てて、人の苦しみ、悩み、嘆きが心からわかるようになった」「この子を育てることで、自分自身が人間的に成長できたと思うことがある」「この子のことをあるがままに受け入れていこうと考えるようになった」については、「あてはまる」、「ややあてはまる」を選択している保護者がほとんどとなっている。

発達の心配に気づいたきっかけの質問に対する回答結果（表 3）は、診断を受けた方については、1 歳半健診が 10 名（40%）、と相対的に多かったのに対して、診断を受けていない方については他の子と比較して、4 名（50%）と最も多かった。

どこで、診断を受けたかという質問に対しては、診断ということもあり、病院が 26 名中、20 名（77%）と一番多い結果となった。病院と児童相談所の 2 箇所ですべて診断を受けた方がいたため合計人数が 26 名となった。

「子どもの障害について最も理解してくれていると思うのはどの方ですか」という質問は、子どもに障害があると診断を受けた方（わかった方）に回答を得た。（表 4）

配偶者が 15 名（50%）と最も多い結果となった。その他の概要は（兄、姉 療育施設の先生、友人）であった。だが、1 つの選択を依頼したが、複数回答をした方が 7 名いたため、重複している結果となった。

子育てに関して最も協力的であるのは誰かという質問に対して、診断を受けた方は、配偶者が 15 名（56%）を選択した方が最も多かった。（表 5）また、選択肢を 1 つとしたが、複数回答をした方がいたため、重複した結果となった。その他の概要としては（姉、兄）

であった。診断を受けていない方が、母親に協力してもらっている比率が高かった。診断を受けた方、診断を受けていない方を合計した全員の回答結果は、配偶者が 36 名中 20 名（56%）となった。

表 1-2 子育ての気持ち

		発達障害群 〔n (%)〕	非発達障害群 〔n (%)〕	P 値
子どもと一緒に落ち着いた 気持ちで外出できる	あてはまる・ややあてはまる	10 (50)	10 (50)	1.0
	あまりあてはまらない・あてはまらない	6 (46)	7 (54)	
子どもに感情的接してしまう	あてはまる・ややあてはまる	13 (59)	9 (40)	0.141
	あまりあてはまらない・あてはまらない	3 (27)	8 (73)	
他の子どもの親から孤立していると感じる	あてはまる・ややあてはまる	10 (59)	7 (41)	0.303
	あまりあてはまらない・あてはまらない	6 (38)	10 (63)	
育児に疲れている	あてはまる・ややあてはまる	12 (57)	9 (43)	0.282
	あまりあてはまらない・あてはまらない	4 (33)	8 (67)	
この子をどうやって育てていけばよいか自信がなくなることがある	あてはまる・ややあてはまる	15 (60)	10 (40)	0.039 *
	あまりあてはまらない・あてはまらない	1 (13)	7 (88)	
子どもに愛着を感じる	あてはまる・ややあてはまる	16 (49)	17 (52)	0
	あまりあてはまらない・あてはまらない	0 (0)	0 (0)	
他の子との成長に差を感じ、つらいことがある	あてはまる・ややあてはまる	16 (52)	15 (48)	0.485
	あまりあてはまらない・あてはまらない	0 (0)	2 (100)	
子どものことは理解できている。	あてはまる・ややあてはまる	13 (46)	15 (54)	0.656
	あまりあてはまらない・あてはまらない	3 (60)	2 (40)	

p<.05

発達障害群と非発達障害群の保護者別に子育ての気持ちを尋ねた質問の結果を（表 1-2）に示した。発達障害群の保護者 16 名、非発達障害群の保護者 17 名を 2 群に分けて χ^2 乗検定を行ったところ、「この子をどうやって育てていけばよいか自信がなくなることがある」の項目では、5%水準で発達障害群の保護者に有意差があり、発達障害幼児の保護者の方が自信がなくなることが多かった（ $p=0.039$ ）。

表 2-1 今現在の保護者自身の気持ち

	あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
悲観的になりやすい	8 (24%)	12 (36%)	10 (30%)	3 (9%)
何ともいえず淋しい気持ちになる	4 (12%)	16 (48%)	11 (33%)	2 (6%)
この子を育てて、人の苦しみ、悩み、嘆きが心からわかるようになった	16 (48%)	14 (42%)	2 (6%)	1 (3%)
家族の他の者へのすまなさを感じることもある	8 (24%)	16 (48%)	7 (21%)	2 (6%)
この子の将来を見通しておかなければならないと焦りを感じている	12 (36%)	14 (42%)	6 (18%)	1 (3%)
どうして私だけが、子どものもことでこれほどまでに悩まなければならないのかと思うことがある	6 (18%)	8 (24%)	14 (42%)	5 (15%)
この子を育てることで、自分自身が人間的に成長できたと思うことがある	21 (64%)	8 (24%)	3 (9%)	1 (3%)
この子のことをあるがままに受け入れていこうと考えるようになった	21 (64%)	10 (30%)	2 (6%)	0 (0%)
				人数 (%)

表 2-2 今現在の保護者自身の気持ち

		発達障害群 〔n (%)〕	非発達障害群 〔n (%)〕	P 値
悲観的になりやすい	あてはまる・ややあてはまる	12 (60)	8 (40)	0.157
	あまりあてはまらない・あてはまらない	4 (31)	9 (69)	
何ともいえず淋しい気持ちになる	あてはまる・ややあてはまる	13 (65)	7 (35)	0.032 *
	あまりあてはまらない・あてはまらない	3 (23)	10 (77)	
この子を育てて、人の苦しみ、悩み、嘆きが心からわかるようになった	あてはまる・ややあてはまる	14 (47)	16 (53)	0.601
	あまりあてはまらない・あてはまらない	2 (67)	1 (33)	
家族の他のものへのすまなさを感じることもある	あてはまる・ややあてはまる	13 (54)	11 (46)	0.438
	あまりあてはまらない・あてはまらない	3 (33)	6 (67)	
この子の将来を見通しておかなければならないと焦りを感じている	あてはまる・ややあてはまる	14 (54)	12 (46)	0.398
	あまりあてはまらない・あてはまらない	2 (29)	5 (71)	
どうして私だけが、子どものもことでこれほど悩まなければならないのかと思うことがある	あてはまる・ややあてはまる	9 (64)	5 (36)	0.166
	あまりあてはまらない・あてはまらない	7 (37)	12 (63)	
この子を育てることで、自分自身が人間的に成長できたと思うことがある	あてはまる・ややあてはまる	13 (45)	16 (55)	0.335
	あまりあてはまらない・あてはまらない	3 (75)	1 (25)	
この子のことをあるがままに受け入れていこうと考えようになった	あてはまる・ややあてはまる	15 (48)	16 (52)	1.0
	あまりあてはまらない・あてはまらない	1 (50)	1 (50)	

p<.05

発達障害群と非発達障害群の保護者別に今現在の保護者自身の気持ちを尋ねた質問の結果を表 2-2 に示した。発達障害群の保護者 16 名、非発達障害群の保護者 17 名を 2 群に分けて χ^2 乗検定を行ったところ、「何ともいえず淋しい気持ちになる」では、5%水準で発達障害群の保護者と非発達障害群の保護者の間に有意差があり、発達障害幼児の保護者の方が淋しい気持ちになりやすかった。(p=0.032)。

発達の心配に気づいたきっかけの質問に対する回答結果（表 3）は、診断を受けた方については、1 歳半健診が 10 名（40%）、と相対的に多かったのに対して、診断を受けていない方については他の子と比較して、4 名（50%）と最も多かった。

どこで、診断を受けたかという質問に対しては、診断ということもあり、病院が 26 名中、20 名（77%）と一番多い結果となった。病院と児童相談所の 2 箇所で診断を受けた方がいたため合計人数が 26 名となった。

「子どもの障害について最も理解してくれていると思うのはどの方ですか」という質問は、子どもに障害があると診断を受けた方（わかった方）に回答を得た。（表 4）

配偶者が 15 名（50%）と最も多い結果となった。その他の概要は（兄、姉 療育施設の先生、友人）であった。だが、1 つの選択を依頼したが、複数回答をした方が 6 名で、無回答が 1 名おり、重複している結果となっている。

子育てに関して最も協力的であるのは誰かという質問に対して、診断を受けた方は、配偶者が 15 名（56%）を選択した方が最も多かった。（表 5）また、選択肢を 1 つとしたが、複数回答をした方がいたため、重複した結果となった。その他の概要としては（姉、兄）であった。診断を受けていない方が、母親に協力してもらっている比率が高かった。診断を受けた方、診断を受けていない方を合計した全員の回答結果は、配偶者が 36 名中 20 名（56%）となった。

表 3 子どもの発達の心配に気づいたきっかけ

	1 歳半健診	3 歳半健診	他の子と比較して	その他
診断を受けた方	10 (40%)	0 (0%)	5 (20%)	10 (40%)
診断を受けていない方	2 (25%)	0 (0%)	4 (50%)	2 (25%)
				人数 (%)

表 4 子どもの障害についての最大の理解者

	配偶者	父親	母親	配偶者の父親	配偶者の母親	その他
診断を受けた方	15 (50%)	3 (10%)	5 (17%)	1 (3%)	3 (17%)	3 (10%)

（複数回答が 6 名、無回答が 1 名のため合計 30 名で%を出している）

人数 (%)

表 5 子育てに関する最大の協力者

	配偶者	父親	母親	配偶者の父親	配偶者の母親	その他	無回答	合計
診断を受け た方	15 (56%)	1 (4%)	4 (15%)	1 (4%)	2 (7%)	1 (4%)	3 (11%)	27
診断を受け ていない方	5 (56%)	0 (0%)	4 (44%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	9
回答者全員	20 (56%)	1 (3%)	8 (22%)	1 (6%)	2 (6%)	1 (3%)	3 (8%)	36

人数 (%)

2. 保育士・幼稚園教師に対するアンケート調査結果

(1) 保育士・幼稚園教師と該当幼児の概要

幼稚園教師・保育士と療育施設職員では、回答に違いがあることが、予想されたためまず別々に集計した。(回答者数 21 名)

保育士・幼稚園教師の年齢は、20 代前半～50 代後半まで 平均年齢は 41 歳であった。幼稚園教諭・保育士の性別は、女性 18 名、男性 2 名、未記入 1 名。保育歴（保育年数）の平均が 6.8 年 計 21 人中、未記入が 10 名。幼児教育歴の平均が 11.9 年 計 21 名中、未記入が 5 名。21 名、全員の幼稚園教師・保育士が今までに、発達障害のある子ども又は、発達障害があると思われる子どもの保育・幼児教育に携わったことがあると回答した。

最も印象に残っている子どもは、現在携わっている子どもが 1 番多く 9 名だった。男児が 18 名、女児 3 名と女児に比べ男児の方がかなり多い結果となった。思い浮かべた子どもの年齢子どもの年齢が、2 歳～6 歳 平均年齢が 4.6 歳。

表 6 思い浮かべた該当する幼児について

	人数	(%)
保護者は、診断を受け入れている（又は受け入れていた）	8	38
診断を受けたが、保護者の受容は難しい	1	5
通院等はしているが、診断は受け入れていない	0	0
受診をすすめている（すすめた）が、まだ通院はしていない	6	29
受診を言い出せない	5	24
その他	1	5

思い浮かべた該当する幼児についての質問（表 6）に対して「診断を受け入れている（又は受け入れていた）」と答えた保護者が 8 名で、全体の 38% だった。また、「受診をすすめている（すすめた）が、まだ通院はしていない」が 6 名であり、園側は気になる行動等があるため保護者に園での様子を伝え受診をすすめてはいるが、受診には至っていない。「受診を言い出せない」は 5 名であり、園側は受診を言い出せないでおり、判断しづらく通院していないという結果だった。「受診をすすめている（すすめた）が、まだ通院はしていない」と「受診を言い出せない」の%を合計すると、53%という結果であり、半数余りが、受診には至っていないという結果であった。

表 7 対象児についての相談相手

	人数	(%)
対象児の保護者（母親）	9	43
対象児の保護者（父親）	1	8
園の職員	15	71
関連する同職種の関係者	10	48
関連する他職種の関係者	3	14
医療関係者	2	10
その他	0	0
いない	1	5

(3 つ選択)

(3 つを選択する質問なため、あてはまるもの全てに○の場合よりも%は下がる。3 つ選択した場合の以下からの質問も同様)

最も相談する相手として多かったのが、「園の職員」であり、15 名で 71%という結果だった（表 7）。次に多かったのが、「関連する同職種の関係者」であり、園内での職員との連携は勿論のこと、園内だけでなく関連する同職種の連携が重要であると幼稚園教師や保育士たちが考えていることがわかる。また、「対象児の保護者（母親）」と回答した教師や保育士も 43%いて 3 番目に多かった。

(2) 保護者支援について

表 8 対象児の保護者への園での支援は十分である（十分だった）と思うか

	十分である	おおむね十分である	やや十分である	不十分である
人数	2	16	2	1
(%)	10	75	10	5

対象児の保護者への園での支援は十分である（十分だった）と思うか（表 8）の質問に対して、「おおむね十分である」が 16 名で 75%という結果であり、多少の不十分さを感じてはいるが、園側としての支援を十分だと思っている教師や保育士が多いという結果だった。「十分である」、「おおむね十分である」、を合計すると 18 名で 85%であり、支援できていると思う教師・保育士が多い結果となった。

表 9 対象児の保護者への支援をすることで、子どもに良い変化があらわれたか

	よくあった	少しあった	あまりなかった	なかった
人数	5	12	4	0
(%)	24	57	19	0

対象児の保護者への支援をすることで、子どもに良い変化があらわれたかという質問に対して（表 9）、「よくあった」、「少しあった」、の合計が 21 名中 17 名で 81%であり、保護者への支援を行うことで子どもに良い変化が現れたという結果だった。保護者への支援を行うことで子どもにも良い影響が現れるということがわかる。

表 10 対象児以外の保護者の方たちは、発達障害について理解があると感じるか

	人数	(%)
多くの保護者がよく理解してくれている	1	5
十分ではないが理解してくれている	7	33
理解していただけない保護者が少しいる	9	43
理解していただけない保護者が多い	4	19

対象児以外の保護者の方たちは、発達障害について理解があると感じるかを尋ねた質問では、「理解していただけない保護者が少しいる」、「理解していただけない保護者が多い」が、21 名中 13 名で 62%という結果だった（表 10）。「理解していただけない保護者が少しいる」が「理解していただけない保護者が多い」より多かったが、合計すると半数以上が、少なからず理解してもらえないと感じているという結果だった。

(3) 障害幼児支援の上で必要なこと

表 11 対象児の発達を支援していくためには、保育士・幼稚園教師には何が必要か

	人数	(%)
園内の協力体制	17	81
園内のカンファレンス	6	29
障害に関する知識の向上(勉強会、講演会に参加する)	12	57
対象児の保護者との面接(状態把握、信頼関係の構築)	18	86
関連する業種との対象児の情報交換、協働	8	38
障害のある子どもの親の会の充実	1	5
その他	0	0

対象児の発達を支援していくためには、保育士・幼稚園教師には何が必要かを尋ねた質問では、「対象児の保護者との面接(状態把握、信頼関係の構築)」が1番多く18名で86%であり、2番目に多かったのが「園内の協力体制」であり17名で81%だった。3番目に多かったのが「障害に関する知識の向上(勉強会、講演会に参加する)」が12名で57%だった。「対象児の保護者との面接を重要(状態把握、信頼関係の構築)」と多くが考えており、保護者との面接をする中で話を傾聴し、信頼関係を築いていくことの重要性を考えていることが伺える結果だった(表11)。

表 12 発達障害のある子どもの保育、教育を充実させていくために連携していく分野について

	人数	(%)
対象児の母親	20	95
対象児の父親	18	86
対象児の祖母	8	38
対象児の祖父	6	29
園の職員	20	95
関連する同職種の関係者	15	71
関連する他職種の関係者	9	43
医療関係者	16	76
対象児以外の保護者	10	48
その他	0	0

発達障害のある子どもの保育、教育を充実させていくために連携していく分野について尋ねた質問では、「対象児の母親」と「園の職員」を選択した方が20名で95%という高い結果となった(表12)。また、「対象児の父親」を選択した方が18名で86%という結果だ

った。母親だけが、保育士や幼稚園教師と連携するのではなく、父親も子どもの様子等を把握してもらい子育てに協力的であることが子どもの心身の健康につながると支援者側は思っていることが伺える。

3. 療育施設職員に対する調査結果（保育士、心理判定員、訓練士）

（回答者数 32 名）

（1）A 市療育施設職員の概要

療育施設職員の年齢は、20 代前半～60 代前半まで平均年齢が 39.3 歳。女性 29 名、男性 2 名、未記入 1 名。保育歴が、1～9 年が 12 名、10～19 年が 7 名、20～29 年が 2 名、30～39 年が 2 名、40～49 年が 2 名、未記入が 7 名、平均保育年数は、13.9 年。

幼児教育歴は、未記入が 24 名であり、0 年が 4 名、1 年が 1 名、6 年が 2 名、30 年が 1 名という結果だった。療育施設では、職員方は、保育や、療育という概念で捉えられている方が多いようであるため、幼児教育歴が 0 年と回答した職員と未記入だった職員とは同じ可能性が高い。

（2）発達障害幼児への保育について

最も印象に残っている子どもは、現在携わっている子どもが 1 番多く 16 名だった。思い浮かべた子どもの性別は、男児が 28 名、女児 3 名、未記入が 1 名。男児が 28 名と女児と比較して幼稚園・保育園と同様かなり多い結果となった。思い浮かべた子どもの年齢が、1 歳～14 歳という結果で、3 歳が 1 番多く 18 名という結果だった。

表 13 思い浮かべた該当する幼児について

	人数	(%)
保護者は、診断を受け入れている（又は受け入れていた）	21	66
診断を受けたが、保護者の受容は難しい	3	9
通院等はしているが、診断は受け入れていない	2	6
受診をすすめている（すすめた）が、まだ通院はしていない	2	6
受診を言い出せない	1	3
その他	3	9

思い浮かべた該当する幼児について尋ねた質問では、療育施設ということもあり、障害を診断されて通所している場合や、保護者自身が発達の心配をしての通所ということもあり、「保護者は診断を受け入れている（又は受け入れていた）」が 66%と多いという結果だった（表 13）。だが、あとの保護者 11 名の 33%の方は診断をされた場合や療育センター等に通所していたとしても、障害を受け入れることができないという結果だった。やはり、この結果から見ても障害の受容ということは一概には言えず、容易なことではないことが伺える。

表 14 対象児についての相談相手

	人数	(%)
対象児の保護者（母親）	14	44
対象児の保護者（父親）	0	0
園の職員	23	72
関連する同職種の関連者	8	25
関連する他職種の関係者	10	31
医療関係者	2	6
その他	0	0
いない	0	0

(3つ選択)

最も相談する相手として多かったのが、前述した保育園や幼稚園の保育士や幼稚園教師と同様に「園の職員」であり、23名で72%という結果だった（表14）。次に多かったのが、幼稚園や保育園とは異なり、14名で44%の職員が「対象児の母親」に相談をしていたとある。また、「関連する他職種の関係者」に相談していたが3番目に多く、療育施設ということもあり、他職種の関係者に相談しやすい環境であるということも言えるのではないかと考える。

(3) 保護者支援について

表 15 対象児の保護者への園での支援は十分である（十分だった）と思うか

	十分である	おおむね十分である	やや十分である	不十分である	未記入
人数	1	21	7	2	1
(%)	3	66	22	6	3

対象児の保護者への園での支援は十分である（十分だった）と思うかという質問に対して、療育施設では、「十分である」と「おおむね十分である」、の合計が22名で69%という結果だった（表15）。これに対し、幼稚園や保育園の幼稚園教師や保育士の結果は、「おおむね十分である」が21名中、16名で75%という結果であり、「十分である」、「おおむね十分である」、を合計すると18名で85%という結果だった。療育施設では、幼稚園や保育園よりも十分だと感じる数が少ない結果だった。療育施設の方が十分だと感じる%が低い結果として出ているのは、通園している子どもの障害のレベルがより重いこと、或いは、職員の専門性の高さ故の認識の厳しさのためではないかということが推察される。

表 16 対象児の保護者への支援をすることで、子どもに良い変化があらわれたか

	よくあった	少しあった	あまりなかった	なかった	未記入	選択不可
人数	12	17	1	0	1	1
(%)	38	53	3	0	3	3

対象児の保護者への支援をすることで、子どもに良い変化があらわれたかを尋ねた質問では、「よくあった」、「少しあった」、の合計が、32 名中 29 名であり 91%だった（表 16）。幼稚園・保育園の結果以上に、保護者への支援を行うことで子どもに良い変化が現れたという結果だった。保護者への支援を行うことで子どもにも良い影響が現れるということがわかる。

表 17 対象児以外の保護者の方たちは、発達障害について理解があると感じるか

	人数	(%)
多くの保護者がよく理解してくれている	3	9
十分ではないが理解してくれている	16	50
理解していただけない保護者が少しいる	8	25
理解していただけない保護者が多い	0	0
未記入	4	13
選択不可	1	3

対象児以外の保護者の方たちは、発達障害について理解があると感じるかを尋ねた質問では、「十分ではないが理解してくれている」が 1 番多く、32 名中 16 名であり 50%という結果だった（表 17）。また、「多くの保護者がよく理解してくれている」、を合計すると、19 名であり 59%と半数以上が理解してくれていると感じている。幼稚園・保育園と比較すると療育施設の方が理解してくれる保護者が多いという結果だった。療育施設は、子どもの発達に何らかの心配や障害がわかり通所していることがほとんどなため、特性等は異なるが、理解を示す保護者の方が、幼稚園や保育園に通園している子どもの保護者よりも多いのではないかと考える。

(4) 障害幼児支援の上で必要なこと

表 18 対象児の発達を支援していくためには、保育士・幼稚園教師には何が必要か

	人数	(%)
園内の協力体制	20	63
園内のカンファレンス	8	25
障害に関する知識の向上(勉強会、講演会に参加する)	13	41
対象児の保護者との面接(状態把握、信頼関係の構築)	18	56
関連する業種との対象児の情報交換、協働	19	59
障害のある子どもの親の会の充実	3	9
その他	3	9

対象児の発達を支援していくためには、保育士・幼稚園教師には何が必要かを尋ねた質問では、1番多く選択されたのが、「園内の協力体制」で、20名で63%という結果だった(表18)。また、「対象児の保護者との面接」は18名で56%、「関連する業種の専門家との対象児の情報交換、協働」は19名で59%という結果だった。幼稚園・保育園の結果では「対象児の保護者との面接(状態把握、信頼関係の構築)」が1番多く18名で86%だった。

表 19 発達障害のある子どもの保育、教育を充実させていくために連携していく分野について

	人数	(%)
対象児の母親	29	91
対象児の父親	22	69
対象児の祖母	9	28
対象児の祖父	8	25
園の職員	24	75
関連する同職種の関係者	18	56
関連する他職種の関係者	23	72
医療関係者	15	47
対象児以外の保護者	11	34
その他	1	3
その他	未記入	9

発達障害のある子どもの保育、教育を充実させていくために連携していく分野について尋ねた質問では、1番多く選択されていたのが、対象児の母親で、29名で91%だった(表19)。この結果は、幼稚園・保育園とほぼ同じだった。また、選択した人数や%は保育園・幼稚園よりも少ないが、2番目に選択したのが、「園の職員」というのは同じだった。「関連

する他職種の関係者」は、23名が選択し72%という結果だった。療育施設、幼稚園・保育園とも母親との連携が大変重要と認識している結果だと考える。

4. A市療育施設へ通園する子どもの保護者への第2調査結果

(1) 保護者・幼児の概要

保護者の年齢は、20代前半～40代後半で、平均年齢は、37歳。子どもの年齢は、2歳～4歳（2歳児3名、3歳児12名、4歳児20名）。子どもの性別は、男児が26名、女児7名、未記入2名。通園年数は、1年が21名、1年半～2年が13名、未記入が1名。

(2) 子どもの発達の心配に対する保護者の気持ちについて

保護者が、子どもの発達の心配に気づいた月齢は、1歳6ヶ月が最も多く13名だった。発達の心配に気づいたきっかけとしては、健診の時や他の子と比較してよりも、そのほか最も多く、気づいた状況として、指さしをしない、音に反応しないなど母親の気づきが多かった。また、兄弟に自閉スペクトラム症があったり、ADHDの症状があったりとその特性と似ているなどから気づいた保護者もいた。

<診断を受けた保護者への質問>

診断を受けた子どもが、23名（自閉スペクトラム症《なお、自閉スペクトラム症には広汎性発達障害、アスペルガー症候群、自閉症等を含む》14名、発達障害1名、言葉の遅れ1名、ADHD1名、裂脳症1名、ダウン症候群2名、脳性運動障害1名、気管梗塞1名、脳性麻痺1名《診断名は、保護者の記述通りに記載》）。

診断を受けたのが、2歳6ヶ月と3歳の年齢が3名ずつおり、自閉スペクトラム症の場合、行動特性等により、3歳あたりの年齢になると診断を受けること（診断がつくこと）が多いことが伺える結果だった。

どのような診断（診断名）を受けたかという質問に対して、生後すぐに障害がわかった場合以外は、自閉スペクトラム症の診断を受けた子どもが14名、発達障害1名、言葉の遅れ1名、ADHDが1名という結果であった。

<子どもが診断を受けていない保護者への質問>

子どもの行動面や症状のチェック項目により、診断を受けていない子ども12名中、ADHDの疑いがある子どもが3名、自閉スペクトラム症の疑いのある子どもが9名という結果となった。

(3) これまでの研究、A市療育施設でのアンケート調査での回答結果をふまえた質問

子どもに障害があるということを知ったときにどのように思ったかという質問に対し、2項目の将来への不安を35名中19名（54%）が選択し、1番目に多かった（表20）。2番目に多かった回答項目が8項目の子どものために何でもできることをやろうという項目だった。親としてできることは何かという前向きな感情や親としての責任など、マイナスな感情だけでなく、様々な気持ちや思いがあるということが見受けられた。

表 20 子どもに障害があるということを知ったときにどのように思ったか（複数回答可）

	人数	(%)
ショックで大変辛かった	13	(37%)
将来への不安	19	(54%)
診断名に疑問を感じた	0	(0%)
これからの人生設計が変わる	8	(23%)
診断前にある程度覚悟していたので大きなショックはなかった	13	(37%)
もやもやした気持ちが晴れた	7	(20%)
少しでも改善できることはないかと考えた	14	(40%)
子どものために何でもできることをやろう	17	(49%)

保育園・幼稚園の保育士や幼稚園教師（支援者側）に希望することとして、最も多く選択された項目が、1 項目目の共感性と支持であり、35 名中、25 名（75%）の保護者が選択した（表 21）。次に多かったのが 4 項目目の人間関係へのサポートであり、23 名（66%）、3 番目に多かったのが、2 項目目の専門性に裏づけされた具体的な助言であり、21 名（60%）という結果だった。

第 1 調査結果に共感した保護者に対して、どのような支援、サポートを希望するかという質問に対し、1～3 番目までを選択する中で、最も多く選択された項目が、2 項目の専門性に裏づけされた具体的な助言が 22 名（69%）、次に 1 項目目の共感性と支持が 15 名（48%）、3 番目に選択された項目が 3 項目の将来への見通しへの示唆が 14 名（44%）という結果だった（表 22）。

表 21 保育園・幼稚園の保育士や幼稚園教師（支援者側）に希望すること（3つ回答可）

	1 番目に選択	2 番目に選択	3 番目に選択	合計
	人数	人数	人数	人数
	(%)	(%)	(%)	(%)
共感性と支持	10	10	5	25
	(29%)	(29%)	(17%)	(75%)
専門性に裏づけされた具体的な助言	9	5	7	21
	(26%)	(14%)	(20%)	(60%)
将来への見通しの示唆	1	2	4	7
	(3%)	(6%)	(11%)	(20%)
人間関係へのサポート	7	9	7	23
	(20%)	(26%)	(20%)	(66%)
医療・福祉等との連携への支援と情報理解	2	2	4	8
	(6%)	(6%)	(14%)	(26%)
医療的ケアやリハビリテーションの充実	0	1	1	2
	(0%)	(3%)	(3%)	(6%)
その他	0	0	0	0
	(0%)	(0%)	(0%)	(0%)

表 22 どのような支援、サポートを希望するか

(第 1 調査結果に共感した保護者からの回答)

	1 番目に選択	2 番目に選択	3 番目に選択	合計
	人数	人数	人数	人数
	(%)	(%)	(%)	(%)
共感性と支持	4 (22%)	4 (13%)	7 (13%)	15 (48%)
専門性に裏づけされた具体的な助言	12 (38%)	7 (22%)	3 (9%)	22 (69%)
将来への見通しの示唆	5 (16%)	7 (22%)	2 (6%)	14 (44%)
人間関係へのサポート	3 (9%)	4 (13%)	3 (9%)	10 (31%)
ペアレント・トレーニング講座の充実	2 (6%)	3 (9%)	1 (3%)	6 (18%)
ピア・カウンセリングへの支援	1 (3%)	1 (3%)	2 (6%)	4 (12%)
医療・福祉等との連携への支援と情報理解	2 (6%)	5 (16%)	5 (16%)	12 (38%)

5. A市療育施設に通園する発達の遅れが心配な幼児の保護者への第1調査の自由記述回答結果 (保護者の記述通りに記載)

(1) 子どもの発達の心配に対する気持ちについての自由記述回答結果

① 発達の心配に気づいたきっかけ

診断を受けていない方

- ・小さい頃から何となく「育てにくい」とは思っていましたが、何となく違うな・・・。
と早い時期から感じていた。周囲に相談しても「気にしすぎ」と言われ 1.6 ヶ月健診もひっ
かからなかった。
- ・言葉が出ない。
- ・健診では、ひっかからなかったが、2 才前位から声を出さない。他の子とまじわろうとし
ないのが気になった。
- ・歩きだした時に、上の 2 人は止まれたけれどこの子は止まらない事が多々あったため。

診断を受けた方

- ・ダウン症です。生後 3 ヶ月で心臓の穴がみつき障がいを知りました。

- ・他の病気で通っていた先生から言われて。
- ・親子教室に通い始め、大勢の人が集まる場所から逃げ出してしまうことに気付いた（1才8ヶ月頃～）
- ・別の病気で入院をした際に、小児科の先生から言葉が遅れていると指摘された。それまでも遅いとは思っていたが、周りから男の子だからと言われて気にしていなかったが、先生から言われたので、検査をうけてみることにした。
- ・1才頃から思い通りにならないと床に頭をゴンゴンしだす。左手に黄色い物をずっとにぎっている。（1才2ヶ月頃～今現在）
- ・1歳半では、「何もおしえてないので」でスルーしてしまい、1～2ヶ月後遊び方（車のタイヤを見るグルグル回る）しゃべらない、共感のなさ、目からあまり気持ちが伝わらない事が気になり、おかしいと思った。
- ・身体的障害であけぼの学園に通所しはじめたが、自閉傾向があるかな、こだわりが強い所があるからと気づき始めた。
- ・未熟児だったため、成長が追いついていないだけだと思っていたが、できないことだらけ。独歩もまだでした。
- ・てんかんの症状がでたから
- ・1歳半健診でひっかかったが、あまり気にしていなかった。2歳半の時、市の赤ちゃん訪問事業で、市の保健師さんが来訪して、発達の遅れを指摘された。
- ・修正月齢4ヶ月になっても全く首がすわらなかった。→6ヶ月でWest症候群の発作が発症。
- ・生後2日目医師より告示。
- ・生まれた時、未じゅく児で自閉症の確立が少し高くなるといわれた。
- ・てんかんの発病
- ・発達遅滞、首がすわなかった。
- ・同時期に生まれた子との成長（動きなど）差から。

（2）子どもの発達の心配に対する気持ちについての自由記述回答結果

①子どもの発達の心配に気づいたときの気持ちについて

診断を受けていない方

- ・死を考えました。事故にあわない様にするためには、どうするのがよいか悩みました。
- ・環境の変化を嫌い、人見知りもあったので、保育園などの集団生活に入る事が出来るのか心配だった。
- ・兄がいるんですが、兄もはなすのがおそかったので様子をみようと思いました。
- ・不安、心配のみ
- ・発達の遅れに対するあせり、悲しい気持ち
- ・どうして、この子なんだろう。・普通に産んであげられなくて、ごめんなさい。・将来ど

うなるんだろう。

- ・まさか、自分の子が？と思いと、どうすればいいのかわからなかった。
- ・言葉が出ず、目が合いにくかったので、コミュニケーションがとれず、この先の不安が大きかった。

診断を受けた方

- ・まさか？信じられない。どうして？といった感情でした。
- ・診てもらう医療機関にすがり気持ちで通った。不安、何をしてもいいかわからない気持ちがいっぱい。
- ・最初は、そのうちしゃべつたろうと安易に思っていたが、市の発達検査を受け、理解度のなさにショックだった。しかし、それをきっかけに子供とむき合う時間が増えた。
- ・第一に不安。
- ・てんかんによる生存への不安。将来への不安。
- ・信じたくない気持ちと、やっぱりそうかなあと揺れ動いていました。
- ・ビックリしたが、うまれてきたのがうちでよかったと思った。夫も同じことを思ったと知りびっくりした。根拠のない自信があった。
- ・まあ、そういう事もあるかな～と思いました。
- ・目の前が真っ黒になったような気持ち。つらい。悲しい。そんな気持ち。ショックでした。
- ・何で家の子がと思った。受け入れなくて、子供にきつくあたってしまった。障害者という目で見えてしまっていた。
- ・まさかうちの子供が病気になるとは思わずになかなか受け入れられませんでした。
- ・インターネットで調べまくり。すぐに自閉症だろうと感じ、医療きかんを受診するも診断はつかず。何なんだろうと常にイラ×2、モヤ×2していた。
- ・どういう風に子育てをしていけばいいのか？とても不安でした。
- ・今はまだ遊んでいるだけの年齢なので良いが、この先、就学、就職できるのかな？と不安になった。
- ・人生で1番辛かった。いっきに色々な不安。学校の事や仕事の事。自分が死んだ時の事まで考えてしまい、不安が多すぎてかかえきれなかった。
- ・不安のひとつ。泣くこともしばしば。
- ・現実を受け入れていかなければ・・・。
- ・信じたくなかった。ちょっとだけ遅いだけだと思って過ごした。
- ・インターネットで心配事を調べていたので、指さしをしない、言葉が出ない、かんしゃくがひどいなど保健師さんに相談し、他の（健常）子との違いなどを聞いて、正直ホッとした思いが強かったですが、我が子をおかしいと思い続けながら育ててきたので罪悪感もあり、そんな自分が嫌で仕方ありませんでした。

- ・ちょっと遅れているが、のんびりしているだけかもしれないと思いたい。
- ・子供の将来が見えず、とても不安になった。障害をもって産まれてきたことに、申し訳ない気持ちになり自分を責めてしまった。兄弟に対しても普通の兄弟をつくれず、申し訳ない、兄弟の将来までも不安になった。
- ・どうして私の子が・・・他の子より遅れているだけかも・・・。
- ・毎晩、涙が止まらず眠れなかった。インターネットで自閉症の症状を検索して、子どもにあてはまるとか、あてはまらないなどを考え続けた。否定したい気持ちが大きかった。
- ・ただしゃべるのがおそいだけとしか思ってなかったのがかなり落ち込みました。
- ・自分を含め、家族の負担が増える。世間から冷たく見られるのではないか。楽しいことはこれから起こらない。この子がいなければいいのに。自分と家族の人生設計が大きく変わる。価値感（観）も変わる。

(3) 子どもに障害があると診断を受けた方（わかった方）に尋ねた自由記述回答結果

①子どもに障害があるということを知ったときにどのように思ったか

- ・少しでも改善できる方法がないか、考えました。
- ・この子の人生はどうなっていくの？私たちがいなくなった後は？2人目も欲しいけどあきらめなくては・・・
- ・保育園や小学校等 先へ進めるか不安。社会への不安
- ・ビックリしたが、うまれていたのがうちでよかったと思った。夫も同じことを思ったと知りびっくりした。根拠のない自信があった。
- ・2才になる直前にいろいろな行動から自分なりに障害児なのだと気付いた時はとてもショックでしたが、その後学園に通い、いろいろな子供や親、先生と接していく中で、自分の子供を受け入れる気持ちができていたので診断名がでたときにはと特に何も思わなかった。
- ・すっきりした。もやもやが晴れた。障害を受けとめられる。前向きになれた。
- ・初診ではちがうだろうと言われて 2 回目受診で診断をうけた為おどろいた。けど理解力の低さから納得できることもあった。
- ・出生時より障がいの可能性を指摘されていたので、少しだけ残っていた、「障がいがないかもしれない」という希望がうち砕かれた気持ちだった。
- ・何が原因なのだろう。直るのだろうか心配になったが遅れているのはまちがいない現実なのでどうしたらよいか相談し子どものためにできることはしようと思った。
- ・やっぱりそうかと少しホッとした。
- ・自分を含め、家族の負担が増える。世間から冷たく見られるのではないか。楽しいことはこれから起こらない。この子がいなければいいのに。自分と家族の人生設計が大きく変わる。価値感（観）が変わる。
- ・ものすごいショックを感じながらも、そんなはずはない！と思いました。

・あまり実感がない。ただ現実の生活で困る行動に対処しながら息子の成長を支えてくというスタンスには変わりがないと思った。

・その子に分かりやすいように言葉かけを考えようと思った。その子の気持ちを分かってあげようといういろいろさぐって考えるようになった。

・ショックだけど仕方ないと思った。でも、診断をうけてしばらくしてから、不安になった。

・この子は私が守る。

・インターネットで心配事を調べていたので、指さしをしない、言葉が出ない、かんしゃくがひどいなど保健師さんに相談し、他の（健常）子との違いなどを聞いて、正直ホッとした思いが強かったのですが我が子をおかしいと思い続けながら育ててきたので罪悪感もあり、そんな自分が嫌で仕方ありませんでした。この思いが確定的になった時、ただただ泣きました。間違いかも知れないと思うようにもなりました。この時期が一番不安でした。認めていたはずの自分と、我が子は普通だと思う自分がいました。

・発達がおそいと分かってはいたけど、心のどこでただおそいだけなんじゃないかと思っていた分、すごくつらかったです。

・ある程度、覚悟して行ったが落ち込んだ。

・驚いて、一晩ほどショックを受けていました。でも、それがわかったからといって、子どもが昨日と違っちゃったわけではないし、目の前で元気に笑ってるし、泣いたって障がいはいなくなるんだから、まあいいや、やれる事をやろうと思いました。

・自分が障害児の親になってしまったということがまずショックだった。もう治らない。一生ということがなかなか受け入れられなかった。

・診断される前に悩み続け、ある程度そうだろうな・・・と思って受診したので、大きなショックはなかった。でも否定する気持ち、希望を持っていた気持ちはなくなった。

・治るのか、どのくらい負担があり、妻は耐えられるのかと不安に思った。

・不安しかなかったが、2か月間くらい発達の事についてしらべた。その後、自閉症なら自閉症で何をやるべきか前だけ見て、できる事はしてやりたい気持ちになった。

(4) 子どもの障害を知ったあと、何か支えになったことは何か。それはどのようなことか？

・病院の先生からのお話で・・・。少しずつがんばりましようと言ってもらったこと。

・夫が病院や買い物など一人で連れて行くのに困る時は協力して支えてくれるようになった。

・友達や親に話をしてわかってもらって協力やうけいれてもらえた事

・夫が、「何も心配しなくてよいから。何があっても必ず守るから」と言ってくれた。

・学園に通っているということ。同じ悩みをもつ親と出会いたくさん話すことができていく。

- ・A市療育施設に通うママ達の存在。本も自閉症の本を中心に読めばOK。（もちろん他の本も読むコトも大事ですが）
- ・2日間おちこんだが、病名にこだわらないよう自分で切りかえた。
- ・病院の定期発達フォローとタイプは違うが障がいを持つ子どもがいる友達とよく会って話すことができたこと。
- ・夫も親たちも大丈夫何とかなると言ってくれた。私のせいだとは、誰も言わなかったこと。
- ・A市療育施設に通っているママとお話ができたと。自分だけではない。がんばろうと思えた。あと、おじいちゃん、おばあちゃんなど周りの家族も子供の障害を受け入れてくれて安心した。
- ・主人が冷静であったこと。兄弟児がいたこと。義母が看護師でいち早く受け入れていこうと言ってくれたこと。
- ・主人、両親の心のサポート
- ・療育で、毎日過ごすお母さん仲間と、その子どもたちの存在が支えです。同じ悩みを、世間話のように気軽に話すことができて、大変救われました。
- ・A市療育施設に通うようになって、だいぶ楽になれた。いろいろ学ぶこともあり、親同士でも話したりして気持ちが楽になれた。
- ・通園のお母さんたちと仲良くしてもらっていること！同じ境遇の者同士わかり合えると・・・。
- ・子供が、がんばってミルクを飲む姿
- ・同じ悩みをもつお母さん方とのランチでの会話です。
- ・子ども自身、（甘えて必要としてくれる、笑ってくれる）同じように障害をもった親の友だちたち
- ・パパと一緒に病院行ってくれたのもたすかったし、日頃も話を聞いてくれて支えになっている。
- ・両親や友人が偏見を持たずに受け入れてくれたこと
- ・A市療育施設に通い始めて、他の母子と接し、先生方にも受け入れてもらえて、一人じゃないと感じられたこと。
- ・母子通園したこと、ありのままの子どもを受け入れてくれる場所に出会った。
- ・両家の実家、兄弟が支えになった。積極的に協力してくれていること。
- ・気持ちを分かってくれる人に出会えた事。A市療育施設などで。子供自身。手がかかるほどかわいく感じる。子供がいるだけで支えになる。

6. A市療育施設に通園する発達遅れの幼児の保護者への第2調査の自由記述回答結果

(1) 子どもの発達の心配に気づいたときの気持ち (保護者の記述通りに記載)

自由記述回答結果を①～⑤の項目に分類した。

①不安感について

- ・心配。不安。母の私に何か子育てでのやり方に問題があったのか考える。家で静かにいる時間が多かったのが反省する。
- ・周りの子と比べて、出来ないことが多く不安になった。
- ・他の子供は親の言うことが分かり行動するのになぜうちの子は分からないのだろうと不安でもあり、どうしていいのか分かりませんでした。
- ・不安のみ
- ・どうしよう。年齢がいつているので私達が死んだ後、姉(5歳半)に負担がかかる。どうしてうちの子が……。どうして気づいてあげられなかったのか。将来どうなるのか(子どもの人生)
- ・私自身、どうしたら良いか不安になりました。"
- ・不安
- ・他の子とは違う不安。
- ・すごく心配になったし、先の事を考えて不安でたまらなくなかった。
- ・今後の成長の漠然とした不安。悲観的な気持ち。共感できないさみしさ、絶望感孤独感。
- ・将来が想像出来なかった。

②兄弟ともに障害があった母親の気持ち

- ・この子もそうなのか。
- ・やっぱり弟ともか……。なんともいえないショック。

③ショックや心配、受け入れられない気持ちについて

- ・ショックの一言につきる。幼児のうちに、できることを全てやる。子に負担をかけずに伸ばすために……。を考えていこうと思いました。
- ・自分が悪いのではないかと思ったし、正直どんな風に育てていけばよいかなやみました。
- ・少し遅れているのならがんばっておいかけようようにしていこう。正直、心配でしたが。
- ・育てにくさを感じていたので何かあるのではと思っていましたが、医者に自閉症の傾向があると言われた時はとてもショックでどのように育てていけば良いのか悩みました。
- ・焦りました。インターネットで、ノイローゼに近い位調べまくって、白黒はつきりさせたくてしょうがない反面、知りたくない、認めたくない。でもやっぱり……。考えない日はなかったです。毎日もんもんとしていました。泣きました。
- ・障害の事を調べていろいろあてはまっていると気がついた時は頭が真っ白になりとても

ショックを受けた。

- ・目の前が真っ黒になりました。インターネットで調べまくりどんどん落ち込みました。
- ・受け入れる事が出来るのかとても心配になりました。
- ・まだ、自閉症だとか、そんなことさえ何にもわからない頃で、市の再健診（2歳）で、発達が1年以上遅れていますと言われショックを受け、何が悪かったのか？と色々考えた。
- ・ショックとかわいそうだと思った。
- ・受け入れる事ができるのかとても心配になりました。
- ・まだ、自閉症だとかそんなことさえ何にも分からない頃で、市の再健診（2歳）で、発達が1年以上遅れていますと言われ、ショックを受け、何が悪かったのか？と色々考えた。
- ・耳が聞こえていないのか心配になりました。
- ・どうしてうちの子は・・・他の子はこんなやのに・・・。
- ・育てるの無理！！障害児の母なんて無理！！できない！！子供可愛くない！！
- ・言葉が遅れている。目が合わない。遊び方がおさない。
- ・気のせいだと思ったかった。
- ・受け入れたくない気持ちでいっぱい。
- ・信じられない。

④発達障害についての知識等について

- ・最初に発達が遅れていると言われても知識がなく障害だということにピンとこなかった。
- ・初めて発達障害という言葉を知って、まずびっくりしました。よく分からなかったです。
- ・頭を打ちつけることで相談したが定期健診でちょっと書いた位の感覚だったため、驚いた。
- ・他人事のように事務的に聞いていた。泣くこともなかった。

⑤その他

- ・普通の同じ年の子のように生活、遊びさせてあげたい。
- ・3歳をすぎても、反応が少ないままだといけないと思い A 市療育施設への通園を考えました。
- ・1歳半健診の時、母乳以外は口にしない、言葉もない。指さししない。とにかく周りの子と見たら全然違うので、少しボーゼンとした感じでした。でもそれ程危機感はありませんでした。

IV. 考察

1. 発達障害児の保護者への理解

今回のアンケート調査は、療育施設に通う、言葉・身体運動面・生活面など発達の遅れが心配な幼児の保護者を対象に実施した。発達障害は、低年齢であればあるほど、障害の判断が困難であり、保護者の障害受容の課題があるためアンケートに回答頂くということがまず難しい。そのため、今回のアンケート回答の対象者は、発達障害者支援法の概念の発達障害だけに絞らず、様々な障害や発達に何らかの心配がある保護者の方を対象に回答を頂いた。幼児の障害としては、第1調査では7割以上の幼児に、第2調査で8割以上の幼児に、発達障害や知的障害の存在が推測された。

今回の調査結果からは、以下のような特徴が認められた。

(1) 発達の遅れが心配な幼児の保護者への第1調査結果の特徴

① 育児疲れや抑うつ傾向について

子育ての気持ちの質問で、表1-1からは、「子どもに感情的に接してしまう」「育児に疲れている」「この子をどうやって育てていけばよいか自信がなくなることがある」について、60%以上が「あてはまる」「ややあてはまる」と答えており、育児困難や育児疲れを感じている保護者が多いことが言える。今現在の保護者自身の気持ちの回答結果（表2）は、「悲観的になりやすい」「何ともいえず淋しい気持ちになる」「家族の他の者へすまなさを感じることがある」について「あてはまる」「ややあてはまる」が60%以上となっており、抑うつ傾向と関連が深いことが言える結果となった。

定型発達児と発達障害児の保護者の子育て困難や不安、抑うつ傾向は発達障害児の保護者の方が高いことは先行研究等で行われている。本研究における表1-2、2-2では、非発達障害児群と示したが、発達障害児の保護者と様々な障害や発達に何らかの心配がある保護者との比較である。発達の心配や障害のある子どもの保護者同士の比較ということもあり、推し量ることは難しい。だが、先述した通り、発達障害児の保護者は、子どもの障害特性ゆえに子育て等で、特有の困難さを抱えやすい。また、表面的に見えにくいため、その子どもをもつ保護者は、子どもに関して周囲からの理解を得にくく、大きなストレスを抱えることにつながりやすいことから、比較検討をした。その結果、「この子をどうやって育てていけばよいか自信がなくなることがある」、「何ともいえず淋しい気持ちになる」の2項目に有意差が見られた。また、有意差は見られなかったものの、「子どもに感情的に接してしまう」、「悲観的になりやすい」、「どうしても私だけが、子どものもことでこれほど悩まなければならないのかと思うことがある」の項目では、発達障害児群の保護者の方が育児困難や育児疲れを感じていることが垣間見える結果と言える。

発達の心配に気づいたときの気持ちの質問の自由記述回答結果では、最も多かったのが「不安」ということだった。「不安」でも様々な「不安」があり、将来への不安、世間から偏見の目で見られるかもしれない不安、先の見えない不安等について書かれていた。

中には、死を考えたというものもあり、保護者の心理的・精神的負担や深刻さが伝わる

内容ばかりだった。湯沢ら²⁶⁾の研究でも、幼児期の診断告知に伴うストレスの大きさを報告している。この時期、自制できないほどイライラして夫にあたり散らしたり、子どもを叩いてしまったり、死を考えてしまうほどに追いつめられていた者がいたことを報告しており、そのストレスがいかに深刻なものであったかを推測している。

乳幼児期ということもあり、子ども特有の行動特徴や個々の成長発達があるため、期待と不安や否定と肯定を繰り返しながらの子育ての時期となる。筆者自身は、障害受容というものは、決して順序よくいくものではなく、様々な気持ちの揺れを日々繰り返していくものではないかと考える。また、少数であったが、前向きに捉えられている内容のものもあった。だが、心の奥底ではどのような気持ちでいるのかということは判断が難しいため支援する側はそのことを考慮しながら支援していくことが重要であると考えます。

②子育ての協力者

障害があると診断を受けた保護者の、最大の理解者として配偶者が一番多かった（30名中15名の回答、1つ〇での回答をお願いしたが、2つ以上〇をした方5名）。子どもの障害についての最大の理解者の質問も、子育てに関して最も協力的であるのは誰かという質問結果と同様、配偶者を選択した保護者が最も多かった。

ただし、母子通園施設においては、一人親家庭では通園に困難を伴うことも多く、一人親家庭が一般における発達障害のある家庭よりも少ない可能性がある。発達障害のある母子家庭における母親の抑うつ傾向についても検討が必要である。

（2）発達の遅れが心配な幼児の保護者への第2調査結果の特徴

これまでの研究、A市療育施設でのアンケート調査での回答結果をふまえた質問では、障害があるということを知ったときにどのように思ったかという質問に対して、自由記述の中で、将来への不安が多く、今回の選択肢でも将来への不安を選択した保護者が最も多かった。先の見通しが見えない、予想が付きにくいことに対して誰しも不安を抱くことが多く、前回の保護者アンケート結果からもわかるように、悲観的になることや抑うつ傾向が見られることも多い。

また、保護者が、保育園・幼稚園の保育士や幼稚園教師（支援者側）に希望することとして、「共感性と支持」を最も多く選択していた。保護者が支援者に希望する支援、サポートとして、まず支援する態度として、「共感性と支持」ということは大前提であると考えます。

湯沢らの研究²⁶⁾でも、母親が欲しかったサポートの内容として2番目に多かったのが、母親の心理面へのサポートであった。子どもの問題だけでなく、母親自身の辛い気持ちを受け止め傾聴して欲しいという気持ちの表れであると述べられている。

育児疲れや抑うつを感じている場合、どのような支援、サポートを希望するかということに対して、支援者側に専門性に裏づけされた具体的な助言を求めていることがわかった。また、「将来への示唆」又は「人間関係へのサポート」が重要となってくることが結果としてあがっており、これらのように具体的な助言や支援を行うことによって、保護者

は日々、気持ちや感情の変化や揺れはあるものの不安や心配等が多少なりとも軽減されるのではないかと考える。湯沢ら²⁶⁾によると、専門家との関わりがサポートとして有効であったと述べる母親も多く、専門家が暖かい態度で母親の相談に応じ、具体的なアドバイスをし、子どもの状態に合わせた働きかけを行うことが、母親の心理的安定感につながることを述べられており、これらのことは、本研究においても示唆されている。

2. 保育士・幼稚園教師・療育施設職員による障害幼児保護者への支援

(1) 保育士・幼稚園教師による保護者への支援

特別支援教育の進展により、幼稚園に特別支援教育コーディネーターが指名されるなど、支援体制が整備されてきている。保育園も幼稚園同様、障害のある子どもの保育について、専門機関と連携を図り、必要に応じて助言等を得ることが言われている。だが、その整備されてきている近年でも、通常の保育園や幼稚園の保育士・幼稚園教師は、日々の気になる子どもとの関わりの中で、難しさを感じている現状がある。一方、気になる子どもとともに、保護者とのかかわりに課題を感じている保育者は多い⁵⁾。

まず、保育園・幼稚園の保育士・幼稚園教師に対するアンケート調査結果の特徴今回の調査結果からは、以下のような特徴が認められた。

思い浮かべた該当する幼児についての質問(表6)に対して「受診をすすめている(すすめた)が、まだ通院はしていない」が6名であり、園側は気になる行動等があるため保護者に園での様子を伝え受診をすすめてはいるが、受診には至っていない。「受診を言い出せない」は5名であり、園側は受診を言い出せないでおり、判断しづらく通院していないという結果だった。「受診をすすめている(すすめた)が、まだ通院はしていない」と「受診を言い出せない」の%を合計すると、53%という結果であり、半数余りが、受診には至っていないという結果であった。

渡辺・田中²⁵⁾らによっても、低年齢児の保護者の揺れ動きやすい心理状態にある保護者に対して、医師でもなく障害児支援の専門職でもない保育者が、障害の可能性を指摘し、受診を勧めてもすんなりと助言を受け入れられないというのは親としてむしろ自然な反応であることが述べられており、そのような現実が今回の調査結果によっても表れている。また、保育士・幼稚園教師が、最も相談する相手として多かったのが、「園の職員」であり、15名で71%という結果だった(3つを選択する質問なため、あてはまるもの全てに○の場合よりも%は下がる。3つ選択した場合の以下からの質問も同様)(表7)。

次に多かったのが、「関連する同職種の関係者」であり、園内での職員との連携は勿論のこと、園内だけでなく関連する同職種の連携が重要であると幼稚園教師や保育士たちが考えていることがわかる。「対象児の保護者(母親)」と回答した教師や保育士も9名で43%と3番目に多かった。保育士・幼稚園教師の意識として、母親に子どもの気になる行動等をどのように理解をしてもらい、伝えるべきか等の困り感はあるが、母親との信頼関係の構築や相互理解をしたいということが表れている結果だと考える。

一方、最も相談する相手の質問の結果として、「園の職員」、「関連する同職種の関係者」、「対象児の保護者（母親）」が多くあがった理由として、保育現場から他機関に相談をしにくいということがあげられる。なぜなら、連携にあたっては、保育現場が単独でできるものはごく限られており、親権者である保護者の了解がなければできないことがほとんどである。子どもたちの障害や発達への心配に対して、保育現場だけでは、対応しきれない問題も多く、特別支援学校や保健所、医療機関、療育機関等幅広い専門機関と連携しなければ対応できないものも少なくない⁵⁾。療育施設とは異なり、保育園・幼稚園では保護者の子どもの障害や発達への心配についての受容という課題が影響している結果ではないかと考える。

対象児の保護者への園での支援は十分である（十分だった）と思うか（表 8）の質問に対して、「おおむね十分である」が 16 名で 75%という結果であり、多少の不十分さを感じているが、園側としての支援を十分だと思っている教師や保育士が多いという結果だった。「十分である」、「おおむね十分である」、を合計すると 18 名で 85%であり、支援できていると思う教師・保育士が多い結果となった。この質問については、園側の意識であり、保護者には聞いていないため、保護者と園側の相違が考えられる。

対象児以外の保護者は、発達障害について理解があると感じるかを尋ねた質問では、「理解していただけない保護者が少しいる」、「理解していただけない保護者が多い」が、21 名中 13 名で 62%という結果だった（表 10）。合計すると半数以上が、少なからず理解してもらえないと感じているという結果だった。幼児の年齢ともなると、子ども本人から、保育園・幼稚園での子ども同士のトラブルを聞くことも多くなることや、他児との行動特性の相違を保護者が感じる事となる。保育園・幼稚園側がどのように理解をしてもらうか、園の雰囲気作り、保護者とのコミュニケーションや信頼関係形成ということが重要となってくる。

発達障害のある子どもの保育、教育を充実させていくために連携していく分野について尋ねた質問では、「対象児の母親」と「園の職員」を選択した方が 20 名で 95%という高い結果となった（表 12）。また、「対象児の父親」を選択した方が 18 名で 86%という結果だった。母親だけが、保育士や幼稚園教師と連携するのではなく、父親も子どもの様子等を把握してもらい子育てに協力的であることが子どもの心身の健康につながると支援者側は思っていることが伺える。

（2）療育施設職員による保護者への支援

療育施設職員に対するアンケート調査結果の特徴今回の調査結果からは、以下のような特徴が認められた。

思い浮かべた該当する幼児について尋ねた質問（表 13）では、療育職員の認識として、32 名中 11 名の 33%の保護者が障害を受け入れることができないという結果だった。やはり、この結果から見ても診断をされた場合や、子どもの発達に心配があることがわかり、療育施設等に通所していたとしても、障害の受容ということは一概には言えず、保護者にとって、容易なことではないことが伺える。

最も相談する相手として多かったのが、前述した保育園や幼稚園の保育士や幼稚園教師と同様に「園の職員」であり、23名で72%という結果だった（表14）。次に多かったのが、14名で44%の職員が「対象児の母親」に相談をしていた。保育園・幼稚園の保育士・幼稚園教師は最も相談する相手が、「対象児の母親」が3番目に多かった。療育施設職員と保育士・幼稚園教師と%には変わりはないものの、障害の診断を受けて通っていること、何らかの発達の心配や気づきがあり療育につながっていることがほとんどである。そのため、保育園・幼稚園に比べ、発達支援についての内容やすすめ方、子どもの現段階の発達状況等を母に相談し、伝えやすいのではないかと考える。また、「関連する他職種の関係者」に相談していたが3番目に多く、療育施設ということもあり、他職種の関係者に相談しやすい環境であるということも言える。

対象児の保護者への園での支援は十分である（十分だった）と思うかという質問に対して（表15）、療育施設では、幼稚園や保育園よりも十分だと感じる数が少ない結果だった。療育施設の方が十分だと感じる%が低い結果として出ているのは、通園している子どもの障害のレベルがより重いこと、或いは、職員の専門性の高さ故の認識の厳しさのためではないかということが推察される。

発達障害のある子どもの保育、教育を充実させていくために連携していく分野について尋ねた質問（表19）では、1番多く選択されていたのが、「対象児の母親」だった。この結果は、幼稚園・保育園とほぼ同じだった。療育施設、幼稚園・保育園とも母親との連携が大変重要と認識している結果だと考える。また、「対象児の父親」も32名中、22名が選択し69%であり、保育園・幼稚園教師が21名中、18名が選択し86%という結果だった。母親だけにまかせるのではなく、父親も保育園・幼稚園、療育施設と関わりも持つことで子どもの成長を知り、子育てへの意識が変わることで、母親や子どもへの良い影響となることを希望している結果だと考える。

3. 発達障害の保護者への支援

北原³⁾や美城¹⁰⁾らによると、発達障害は、外見からわかりにくいこともあり、親の葛藤は特に大きいとも考えられる。また、発達障害がある子どもの家族は、障害のない子どもの家族に比べて、様々な心理的な負担感や困難を抱えていることが指摘されている¹⁴⁾。今回のアンケート調査結果からもわかるように、子育ての気持ちとして、育児困難や育児疲れを感じている保護者が多いことがわかる。

また、道原・岩元¹¹⁾らは、発達障害のある子どもの親にはうつ病あるいはうつ状態が多いことを述べているように、今現在の保護者自身の気持ちの回答結果からも、抑うつ傾向が同様に強いことが言える。

だが、今回のアンケート対象者は、療育施設に通園している子どもの保護者であるため療育施設に通園していない子どもの保護者とは心理状況が異なることが考えられる。田上・安部²²⁾によると、障害児通園施設に通う多くの母親は、同じく障害のある子どもをも

つ親同士頻繁に会い、情報の交換や愚痴の言い合いをすることでポジティブな感情をもつ、あるいは、ストレス発散となっていたことを報告している。母親同士のエピソードからは、ネガティブな感情や表現は全く語られず、ポジティブな内容ばかりであったことも特筆すべき点であると述べている。母親同士のピアサポートの影響の大きさについては、石本・太井¹⁾らによっても報告されている。月本・足立²⁵⁾らの研究では、親の気持ちを安定させ、立ち直りをサポートしていくためには、療育機関で助言や指導を受けること、障害児の母親同士の交流があることなどが、重要であるとされている。本研究では、アンケートの自由記述形式部分で書かれてあったが、A市療育施設に通園するようになってから、障害がある保護者同士での悩みの共有や話をする中で、ピア・カウンセリングのような役割を果たしていることも伺えた。

その反面、療育施設に通園すること、母親同士の関わりは、ポジティブな意見や研究結果が多い中、田上・安部²²⁾らによると専門家への相談の頻度については、積極派と消極派に二分されており、前者は、感謝や支え、といったポジティブな感情が語られていたのに対し、後者は、躊躇や遠慮といった踏み止まりの気持ちが語られていると述べている。山地ら²⁸⁾の研究では、専門家とのコミュニケーションの不安を抱える様相が示され、大鐘¹⁸⁾は、通園中の療育指導員からのサポートによる前向きな感情については、母子通園か単独通園かといった通園形態の違いにもよることを述べている。

また、障害のある子どもをもつ母親の精神的健康や養育態度に最も影響するのは、配偶者（夫）からのソーシャルサポートであると多くの研究で指摘されている。一般的に、母親にとって最も身近な家族であり、存在が配偶者と言えるだろう。特に、育児における、夫婦間のサポートの中で、夫からの温かい言葉かけや励ましといった情緒的サポートが有効であるということが多くの研究で指摘されており、広汎性発達障害児をもつ母親においても夫からの情緒的サポートが他のサポートよりも有効であるとされている。広汎性発達障害児をもつ母親のストレス研究によると、夫からのサポートを受けている母親は、特に情緒的なサポートが重要であることが指摘されている^{12) 17)}。このように、母親にとっては、配偶者からのソーシャルサポート、特に情緒的なサポートの存在が母親の育児ストレスを低下させると先行研究では述べられている。住田²¹⁾、小島⁴⁾、岡野ら¹⁷⁾は、コミュニケーションがとられている夫婦の場合や、父親が母親とよく話をし、子どもの特性を理解することが、母親の育児を前向きに捉えることと関連していると述べている。その中で、岡野ら¹⁷⁾の研究では、母親と父親のサポートの捉え方が不一致という結果も出ている。

今回のアンケート調査では、子どもの障害への最大の理解者として25名の回答者中、15名（50%）、子育てに関しての最大の協力者が、36名中、20名（56%）が配偶者を選択しており、半数又は半数以上という比較的高い結果となった。だが、配偶者が子どもの障害への理解が高いことや子育てに協力的であるかどうか、母親の抑うつや育児困難などに影響しているかについてはわからなかった。また、配偶者からどのような理解や子育ての協力があるのか具体的な回答は得ていないため検討の必要がある。

V. 終わりに

今回のアンケート調査では、60%以上の保護者が育児困難や育児疲れを感じており、抑うつ傾向に関連する質問回答は、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると60%以上となっている。また、第1調査での回答結果をふまえた質問の子どもに障害があるということを知ったときにどのように思ったかについては、将来への不安が最も多い結果となった。自由記述内容では、保護者一人一人の具体的な気持ちや思いが反映されている内容ばかりであった。そして、保育園・幼稚園の保育士や幼稚園教諭、療育施設職員に希望することが、共感性と支持が最も多かった。共感性と支持ということは、支援者側が、傾聴し保護者の気持ちを受け止め、共感することによって、保護者が安心感を持ち、信頼関係の構築につながることになる。牧野⁸⁾も、保育者は、基本的姿勢として、保護者の話を傾聴することが重要になる。保育者は、つい自分の意見を言いたくなることや、指導をしたくなるものであるが、まずは、保護者の思いを十分に受け止めることが大切である。保護者の話を受け止め理解しようとする保育者の姿勢から、保護者への支援を行う上で最も大切な相互の信頼関係が形成され、保護者の理解や協力が得られるようになると述べている。

保護者が支援者に希望する支援、サポートとして、まず支援する態度として傾聴することと同様、「共感性と支持」ということは大前提であると考ええる。その上で「専門性に裏づけされた具体的な助言」や「将来への示唆」又は「人間関係へのサポート」が重要となってくるということが結果としてあがっており、これらのことを行うことによって、保護者は日々、気持ちや感情の変化や揺れはあるものの不安や心配等が多少なりとも軽減されるのではないかと考える。

また、第1調査結果で抑うつを強く感じた保護者からの回答結果をもとに、第2調査でその回答結果に共感した保護者からの回答からは、そのようなときに、どのような支援、サポートを希望するかという質問内容に対して、最も多かった回答結果が、専門性に裏づけられた助言だった。抑うつを強く感じた保護者であると、自分ではどうしていけばいいのか判断力や思考が弱っていることが考えられ、先の見通しができる専門的な助言が必要な時がある。保護者は、保育者に専門的な対応や適切な支援を求めている。2009年には、保育士養成課程の改訂があり「保育相談支援」が必修科目として新たに設定されている⁹⁾ これからの課題として、障害や発達のおつまずきに対する支援に当たっては、医療・療育との連携が重要だと言われているが、保育園・幼稚園との連携も必然でありお互いの内容を保護者をはじめとした関係者と共有していく道筋を明らかにしていくことが重要である。

そして、保育士・幼稚園教師、療育施設職員に、発達障害のある子どもの保育、教育を充実させていくために連携していく分野について尋ねた質問(表19)では、1番多く選択されていたのが、「対象児の母親」だった。この結果は、幼稚園・保育園とほぼ同じだった。保育園・幼稚園、療育施設とも母親との連携が大変重要と認識している結果だと考える。このことからわかるように同僚や専門家との連携も勿論のことだが、子どもにとって一番身近な存在である母親との連携を重要と考えている保育者が多く、母親にとっても心強

い結果と言えるのではないかと考える。

保育者が保護者を支援していく場合には、子どものありのままの姿を認めていくことに加え、子どもの成長や発達について期待や希望を込めて語っていくことが、重要である。幼児期は、保護者の気持ちの揺れの大きい最初の大切な時期であるため、保育者は保護者にとって、子どもの未来と希望を語る信頼できるパートナーとなっていかなければならない。

謝辞

調査に際し、ご協力頂きました A 市療育施設の学園長ならびに、施設職員の皆様と、保護者の皆様、A 市公立の幼稚園の園長ならびに、幼稚園教師の皆様と、B 市など他の市町村の公立保育園の保育士、学童保育所に勤める保育士、公立幼稚園に勤める幼稚園教師の方々に心より感謝申し上げます。

また、本論文作成にあたり、多大なご支援とご指導を賜りました指導教官の大谷正人先生をはじめ、三重大学大学院教育学研究科特別支援領域の先生方に心より感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 石本雄真・太井裕子（2008），障害児をもつ母親の障害受容に関連する要因の検討ー母親からの認知，母親の経験を中心としてー 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 1，（2）29－35
- 2) 木村直子（2009），幼児健康診査における「発達障害」スクリーニングの手法 鳴門教育大学研究紀要 24，13－19
- 3) 北原佑（1995），発達障害児家族の障害受容 総合リハビリテーション 23，（8）657－663
- 4) 小島未生・田中真理（2007），障害児の父親の育児行為に対する母親の認識と育児感情に関する調査研究 特殊教育学研究 44，（5）291－299
- 5) 厚生労働省 保育所保育指針 平成 20 年度版
- 6) 呉裁喜・岡田節子・朴千満・中嶋和夫（2006），障害幼児の発達特性と母親のニーズの関係 大東文化大学紀要 44，15－21
- 7) 牧野桂一（2012），保育現場における子育て相談と保護者の支援のあり方，-筑紫女学園大学短期大学部人間文化研究所 23，181－182
- 8) 牧野桂一（2012），保育現場と療育機関とが連携した子どもの支援のあり方 筑紫女学園大学筑紫女学園大学短期大学部紀要 23，222－223
- 9) 眞野祥子・宇野宏幸（2007），注意欠陥多動性障害児の母親における育児ストレスと抑うつとの関連 小児保健研究 66，（4）524－530
- 10) 美城圭美・藤原直子・日上耕司・大野裕史・佐田久真貴・松永美希・渡辺由己・久保義郎・園田順一（2008），発達障害のある子どもの保護者のための親訓練プログラムの効果

—親の障害受容に注目して— 吉備国際大学 臨床心理相談研究所紀要 5, 47-65

11) 道原里奈・岩元澄子 (2012), 発達障害児をもつ母親の抑うつに関連する要因の研究—子どもと母親の属性とソーシャルサポートに着目して— 久留米大学心理学研究 11, 74-83

12) 森口香・岩満優実・山本賢司・金生由紀子・中村賢・井上勝夫・宮岡等 (2008), 広汎性発達障害の子供をもつ母親のソーシャルサポートの検討 ストレス科学 23, 104-114

13) 文部科学省 発達障害者支援法施行について 平成 17 年 4 月 1 日施行

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/main/002/001.htm

14) 中嶋和夫・斎藤友介・岡田節子 (1999), 母親による育児負担感に関する尺度化 厚生 の指標 46, 11-18

15) 新美明夫・植村勝彦 (1980), 心身障害幼児をもつ母親のストレスについて—ストレス 尺度の構成— 特殊教育学研究 18, 18-33

16) 野邑健二・辻井正次・石川美登里 (2004), アスペルガー症候群の子どもを持つ母親の 精神的健康度—抑うつ傾向を指標として—厚生労働科学研究費 (こころの科学研究事業) 「アスペルガー症候群の成因とその教育・療育的対応に関する研究」平成 15 年度総括・分 担研究報告書 42-45

17) 岡野維新・武井祐子・寺崎正治 (2012), 広汎性発達障害児をもつ母親の育児ストレッ サーと父親の母親に対するサポート 川崎医療福祉学会誌 21, (2) 218-224

18) 大鐘啓伸 (2009), 母子通園施設における障害児とその母親への心理的援助 情緒的交 流の視点からの考察 心理臨床学研究 27, (2) 163-173

19) 太田顕子 (2010), 発達障害のある幼児児童を育てる母親のソーシャルサポートに対す る認識—家族、仲間及び専門機関からの支援に着目して—幼児児童教育研究 22, 35-44

20) 杉山登志朗 (2000), 軽度発達障害 発達障害研究 21, 241-251

21) 住田正樹・中田周作 (1999), 父親の養育態度と母親の育児不安 九州大学大学院教育 学研究紀要 2, 19-38,

22) 田上裕子・安部順子 (2013), 幼児期の障害のある子どもをもつ母親のメンタルヘルス に関する研究 福岡教育大学紀要 62, 第 4 分冊, 21-31

23) 武井祐子・寺崎正治・門田昌子 (2006), 幼児の気質特徴が養育者の育児不安に及ぼす 影響 川崎医療福祉学会誌 16, (2) 221-227

24) 田中康雄 (2012), 幼児期から青年期までの ADHD 症状の年齢による変化 精神神経 学雑誌 114, 447-454

25) 月本由紀子・足立自朗 (1998), 障害児をもつ母親の受容と立ち直りに関する研究 埼 玉大学紀要教育学部 (教育科学) 47, (1) 51-67

26) 渡辺顕一郎・田中尚樹 (2014), 発達障害児に対する「気になる段階」からの支援 — 就学前施設における対応困難な実態と対応策の検討— 66, 33-34

27) 山下裕史朗 (2011), 注意欠陥多動性障害 母子保健情報 63, 6-10

- 28) 山地瞳・大東万紗子・久保仁志・福本奈緒子・宮原千佳・中村奈々子 (2010), 発達障害児をもつ母親が抱く専門援助に対する意識の分類 兵庫教育大学発達心理臨床研究センター紀要 発達心理臨床研究 16, 37-49
- 29) 吉岡恒夫 (2010), 発達障害児の支援—②—乳幼児期の母親支援と小学校期の学校での支援—愛知教育大学教育実践総合センター紀要 13, 251-258
- 30) 湯沢純子・渡邊佳明・松永しのぶ (2007), 自閉症児を育てる母親の子育てに対する気持ちとソーシャルサポートとの関連 昭和女子大学生生活心理研究所紀要 10, 119-129